はじめに

本書には，共通テスト，センター試験の問題とマーク式の私大の入試問題を掲載している。共通テストとセンター試験の問題は，あまり違いはないが，新しい問題形式としては，図や文章などを資料として使用したもの，会話文を使用したもの，文をカードに入れたものが少しある。また，共通テストは思考力・判断力・表現力を中心に評価する新しいテストとされ，センター試験では，図表なしで文の正誤を判定したり，用語や地名を選択したりする問題が数問あったが，共通テストではすべての問題が図表か資料をみて判定するものとなっており，その結果として問題文の読み取りや図表の読み取りに時間がかかるので，大問は6題から5題に，マーク数は35から31に減少した。しかし，問題の内容は同じなので，平均点に変化はなかった。出題傾向としては，地図や写真，地形図，統計地図，グラフ，統計表などの素材を多用し，その読み取り能力や理解力，すなわち地理的見方・考え方を試す問題が中心で，暗記学習の多い世界史や日本史に比べると，論理的思考力が必要とされる。出題分野は，自然環境と自然災害，資源と産業，村落・都市と人口，地誌，地域調査で，センター試験で出題されていた比較地誌はなくなったが，他は同じである。問題文や会話文などには，教科書に太字で書いてある地理用語や地名が出るので，重要な用語を覚えて意味を理解しよう。知らない地名があれば，地図帳を見て位置も覚えよう。また，ほとんどが図表の読み取り問題となったので，いろいろな地形や気候区，農業地域，鉱産資源，大都市，言語，宗教などの分布をしっかりと覚えよう。統計図表の読み取り問題では，順位の概要とその背景を理解することが必要。私大では，大学によって出題分野が異なるので，過去問を見ておく必要がある。用語や地名，位置，統計順位などに関するシンプルな問題が多いが，現行の教科書には記載されていないような用語や地名が出題されることもあり，細かい知識中心の学習が必要とされる。ただし，共通テストで必要とされる地理的考察力には，用語や地名，位置などの基本的知識が前提として必要なため，私大の問題を，知識の確認のために利用することができる。解答に必要な事項は本書の解説に書いてある。学習対策として，自然環境は地形や気候の分布をその成因から理解する。メガロポリスなどの用語は意味を正確に覚える。農林水産業や鉱工業では主な品目の生産・輸出入上位国とその背景を理解する。農業・工業・人口・都市は先進国と発展途上国に分けて違いを考える。地誌は地域全体の自然・社会・産業の特徴を地図の利用によって把握する。地形図は自然環境や村落・都市，地域調査で出題されるので，等高線や地図記号から読図できるように。

目　　次

第１章　地図と地理的技能　（６問）　7

1 地図・地図投影法
2 正距方位図法
3 メルカトル図法，時差，地図
4 尾根・谷・集水域
5 地形図読図
6 地域調査

第２章　自然環境　（７問）　29

1 世界の地形
2 世界の気候
3 日本の自然環境と文化
4 河川
5 環境問題
6 自然環境と自然災害
7 世界の自然環境と自然災害

第３章　資源と産業　（８問）　61

1 農業地域区分
2 資源と産業
3 漁業・林業
4 エネルギー・鉱産資源
5 資源と産業
6 工業
7 経済のサービス化
8 交通・通信・貿易

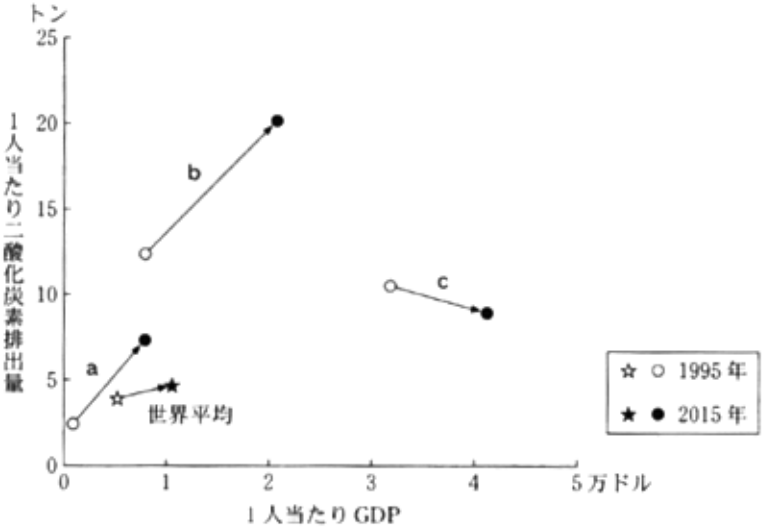
第4章　人口，村落・都市，生活文化，民族・宗教　(11問)　109

1 人口と人の移動
2 移民
3 人口と都市
4 日本の人口や都市
5 集落
6 都市
7 衣食住
8 国家群・貿易
9 世界の民族・宗教・言語
10 民族問題・領土問題・紛争
11 都市・村落と生活文化

第5章　地誌　(12問)　161

1 中国地誌
2 東南アジア地誌
3 南アジア地誌
4 中央アジア地誌
5 西アジア地誌
6 アフリカ地誌
7 ヨーロッパ地誌
8 地中海周辺の地誌
9 ユーラシア大陸北部地域，ロシア連邦の地誌
10 北アメリカ地誌
11 ラテンアメリカ地誌
12 オセアニア地誌

問3　次にリナさんたちは，1995年と2015年における各国のデータを調べて，経済発展が環境へ及ぼす影響について考察した。次の図3は，いくつかの国a～cと世界平均について，1人当たりGDPと1人当たり二酸化炭素排出量の変化を示したものである。また，後の文サ～スは，図3中のa～cのいずれかにおける変化の背景をリナさんたちが整理したものである。a～cとサ～スとの組合せとして最も適当なものを，後の①～⑥のうちから一つ選べ。



World Development Indicators により作成。

図　3

サ　産業構造の転換に伴い脱工業化が進み，再生可能エネルギーの普及も進んだ。

シ　資源が豊富にあるため，国内の燃料消費のコストが低いことや，世界的な資源需要の高まりを背景に経済成長が進んだ。

ス　農業や軽工業が中心であったが，その後は工業化が進み，重工業の比率が高まった。

	①	②	③	④	⑤	⑥
a	サ	サ	シ	シ	ス	ス
b	シ	ス	サ	ス	サ	シ
c	ス	シ	ス	サ	シ	サ

オーストラリアやマレーシア，ブルネイなど東南アジアからの輸入が多い。b．正しい。日本には多種の鉱産資源が分布し，閉山した鉱山も多く自給率も低いが，石炭，原油，天然ガス，金鉱，銀鉱，銅鉱などは現在も生産されている。c．誤り。石炭は自給率が0.4%（2019年）にすぎない。自給できる唯一の鉱産資源は石灰石で，産地にはセメント工場が立地している。d．正しい。熱水鉱床は海底火山にみられ，海底面に噴出する高温の熱水から沈殿した銅，亜鉛，鉛，金，銀などを含んでいる。メタンハイドレートはメタン分子と水分子が低温や高圧の状態で結合した氷状の物質で，「燃える氷」とも呼ばれ，日本近海に大量に埋蔵されている。

5　資源と産業

解　答

問1　④　問2　③　問3　⑥　問4　②　問5　③　問6　②

■問1　図1中の凡例アは，古期造山帯のオーストラリアのグレートディヴァイディング山脈などにみられるので炭田であり，凡例イは，アラビア半島付近に多いので油田である。Aは世界最大の生産国と消費国が同一であるとされているが，表①・②からわかるように石炭も石油も同じである。しかし，石炭は生産上位国の占める割合が高いので，石炭が該当する。Bは石油で，世界のエネルギー供給量に占める割合（2022年）は31.6%と最大で（石炭は26.7%），埋蔵量の約50%は中東である。

表①　石炭の生産量・消費量・埋蔵量　（単位：%）

	生産量（2022年）		消費量（2022年）		埋蔵量（2020年）	
1位	中国	51.8	中国	54.8	アメリカ合衆国	23.2
2位	インド	10.3	インド	12.4	ロシア	15.1
3位	インドネシア	7.8	アメリカ合衆国	6.1	オーストラリア	14.0
4位	アメリカ合衆国	6.1	日本	3.0	中国	13.3
5位	オーストラリア	5.0	インドネシア	2.7	インド	10.3

表②　石油の生産量・消費量・埋蔵量　（単位：%）

	生産量（2022年）		消費量（2022年）		埋蔵量（2020年）	
1位	アメリカ合衆国	18.9	アメリカ合衆国	19.7	ベネズエラ	17.5
2位	サウジアラビア	12.9	中国	14.7	サウジアラビア	17.2
3位	ロシア	11.9	インド	5.3	カナダ	9.7
4位	カナダ	5.9	サウジアラビア	4.0	イラン	9.1
5位	イラク	4.8	ロシア	3.7	イラク	8.4

『世界国勢図会』により作成。